

選考委員 講評 OUR JUDGES' REVIEWS



水沢 勉
MIZUSAWA Tsutomu
美術史家・美術評論家

第4回福岡アートアワードの審査にあたって感じたことをここに記しておく。コロナ禍の2022年度に始まった、この新しい賞が、さらなる将来の表現の可能性を後押しし、同時にその空間の広がりをも促していくはずだ…そうわたしは期待し、すでに過去三回の審査に参加することができた。

今回の受賞者は、いずれも現在の日本での造形表現のレベルを証してくれる才能の持ち主たちであり、審査過程でも各委員の評価はほぼ一致していたように思う。とりわけ市長賞を受賞した宮本華子は、全員一致の高評価の対象となった。「家」を主題にして、女子美術大学で学んだ油彩画での表現を出発点にして、布や糸などのファイバー系の立体物を活かしたインスタレーション、犬たちの「家」である犬小屋などさまざまな既存物による野外や室内での空間の創出やパフォーマンス、写真や映像。まったくジャンルに捉われないことなく表現を解放させる試みを続けている。しかし、「家」は、開かれると同時に閉めら



植松 由佳
UEMATSU Yuka
国立国際美術館 学芸課長

初回から審査員として加わらせていただいている福岡アートアワードだが、回を重ねるにつれて応募するアーティストたちの強度を実感している。そうした応募者の中で宮本華子、谷澤紗和子、川辺ナホ、平野薫の四名が受賞し、それぞれ独自の視点で現代の表現の可能性を示した。

宮本は日常の風景から時間の経過や人々の関係性を丁寧に描き出し、谷澤は言語と身体の関係性を視覚的に再構築することで、日常的な行為の奥深さを浮かび上がらせた。川辺は理想と現実の交錯する象徴的な問いを提示し、平野は衣服という媒介を通して個人と歴史の接点を静謐に表現している。いずれも技巧や形式の巧みさとどまらず、観る者に思索と感受を促す力を持っている点が共通している。

本アワードの特筆すべき意義は、地域的文脈を背景にしつつも、作家それぞれが普遍的な問いを自らの表現として具体化しているところにあると言えるだろう。受賞作群は、物や身体、空間を媒介に観者との対話を意識して

伝統的な素材からAIを取り入れた作品まで、例年以上に手法や素材の広がりが印象的な回だった。そのうえで、最終的に切り絵や糸・布といった、ファイン・アートの周縁に置かれてきた手法や素材を用いる作家が一部選ばれたことは、いま、こうしたタンジブルな労働と時間を伴う手仕事がいっそう強度を放っていることの表れだろう。

選出された4名の作品はどれも、観る者を思わず引き寄せるところが謎めいた造形を、強靱なコンセプトと批判的姿勢が支えていた。一番身近でありながら、ときに相いれない存在ともなりえる家族(宮本華子)。各時代・地域で確かな足跡を残した女性作家との、切り絵を媒介とした越境的な連帯(谷澤紗和子)。一吹きで舞い散る炭に宿された近代の重層性(川辺ナホ)。戦時下の記憶を運ぶ羽織を一本ずつ解体していく行為(平野薫)。いずれも、小さな日常的行為や小単位の物事の見直しや復権から出発し、新たな視野を切り拓く力を秘めており、4名とも

れるものである。そのアンビグイティ(多義性／曖昧さ)に積極性を見出そうとしているのだ。そのことが自身が関わるアーティスト・イン・レジデンスのプログラムにも繋がっている。

宮本華子にとってベルリンでのレジデンス体験は決定的なものであった。今回の優秀賞の受賞者となった川辺ナホと平野薫にとってもドイツに滞在し、生活空間を、問題意識をもって対象化し、芸術表現をただの表面的な美化とは異なるものとする姿勢に深い影響を及ぼしていると思われる。ふたりの作品には、炭鉱や戦争など歴史の忘れてはならないモチーフが造形化されている。現在形の切絵に取り組んでいる谷澤紗和子は、切られた紙の影をとまなう立体性を明確に意識し、解かれた状態の物質としての表現を追求しているように思われる。その表現の出発点のひとつが、高村(長沼)智恵子の「紙絵」(高村光太郎の言葉)であったことも、忘れがちなモダニズムの歴史をもわたしたちに垣間見、思い出させてくれる。

おり、鑑賞を通じて思索を喚起する構造を備えている。また、個人の経験や感覚を社会的・歴史的文脈と交差させる表現は、地域アートシーンにおける表現の多様性と可能性を示すと同時に、現代アートが担う批評的な機能をも提示している。

また今回の受賞作品は、総じてインスタレーション性の高さも見受けられた。時には、その点が美術館収蔵の問題にもなりうるのだが、福岡市美術館の学芸員たちがアーティストたちと協議を重ね、買い上げ可能作品として候補リストに連なる過程も意義深い。

今回の受賞アーティストたちは四名の女性作家たちだが、審査の過程でジェンダーを意識した訳ではまったくない。彼女たちの制作にいとむしなやかな姿勢が、審査員である私たちに響き、審査の過程でも大きな議論はなく決定したと記憶している。こうして選ばれたアーティスト、作品たちが福岡における現代美術の成熟と新たな視点の獲得を象徴していると言える。

際立っていたように思う。

最後に、受賞者の福岡での活動履歴が、美術館での滞在制作からインディペンデント・アーツスペース、民間ギャラリーまでバランスよく広がりを持ち、またそれらがしばしば九州各地の文脈に根差した継続的取り組みと共に展開していることは、福岡・九州地域の持つ豊かな磁場を示しているだろう。近年、惜しまれつつ閉鎖されたアーツスペースもあるが、今後もこれらの場が相互補完し、アーティスト、運営に携わる人々、そしてそこに集うコミュニティ皆の連帯によって、より一層育まれていくことを切に願ってやまない。



第4回 福岡アートアワード受賞作品展 The 4th Fukuoka Art Award Exhibition

2026 **3.28**[土] → **6.21**[日]

会場 近現代美術室B

ごあいさつ

福岡アートアワードは、福岡市美術館がFukuoka Art Nextの一環として実施する事業であり、2022年度に創設されました。福岡市内で活動をおこない、今後飛躍が期待できるアーティスト(美術作家)を対象に、贈賞によりアーティストを支援するものです。

第4回福岡アートアワードでは、応募資格を過去2年間に福岡市内で公開・発表をともなう活動をおこなった作家とし、2025年7月1日から8月31日の募集期間に、51組の応募がありました。同年10月24日に開催した第1次選考委員会では、応募資料をもとに、美術史家・美術評論家 水沢勉氏、国立国際美術館学芸課長 植松由佳氏、ナショナル・ギャラリー・シンガポール キュレトリアル&コレクションズ ディレクター 堀川理沙氏というグローバルに活躍するキュレーターで構成された選考委員による厳正なる審査により、11組が第2次選考委員会に進みました。同年11月21日に開催された第2次選考委員会では、作家から提供された追加資料についての審査がおこなわれ、最終的に4名の受賞が決まりました。

本アワードは、作品を購入し、福岡市美術館の所蔵品とするという、国内でも他にないユニークな形式を取ります。4名の作品は、収集にふさわしい作品かを審議する収集審査会に諮られ、承認されました。本展覧会では、福岡アートアワードの受賞作家4名の買い上げ作品を初披露いたします。



福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051

市長賞 MAYOR'S AWARD



宮本 華子

MIYAMOTO Hanako

《在る家の日常》

Everyday Life at Home

2024

1987年 熊本県荒尾市生まれ

2012年 女子美術大学大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画研究領域 修了
熊本県在住

受賞コメント

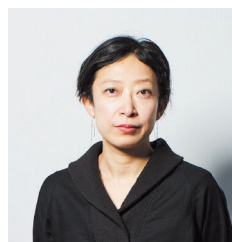
本作《在る家の日常》は、個人的に非常に大切な作品です。この作品が九州の美術館に収蔵されることが本当に嬉しく、福岡アートアワードに応募することに協力してくれた九州の大人たちに心から感謝しています。

作品コメント

相容れない家族という他者と、向き合うために制作を続けてきました。近年、両親よりも長く一緒に暮らした祖父母を家から見送りました。彼らの老いていく姿と終わりは私にはとても悲しく、同時にとても美しく見えました。《在る家の日常》は、何処にでもある家の出来事を「家」を作ることで形にした作品です。



優秀賞 MERIT AWARD



川辺 ナホ

KAWABE Naho

《樂園を探して (-Et in Arcadia Ego)》

In Search of Utopia (-Et in Arcadia Ego)

2024

1976 福岡県福岡市生まれ

1999 武蔵野芸術大学 映像学科 卒業

2006 ハンブルク美術大学 卒業(ディプロム)

ドイツ・ハンブルク在住

受賞コメント

「炭」をテーマにした作品を制作しています。粉状の炭で植物の紋様を型取る手法は、石炭紀の植物の記憶を想像的に呼び戻す試みです。産業、労働、エネルギー、そして気候危機——「炭」をめぐる重なり合う問題や過去と現在の関係を、単純化できない社会の複雑さと対峙しながら、作品の中に美的な緊張として留めたいと思っています。今回、優秀賞をいただいた《樂園を探して (-Et in Arcadia ego)》は、福岡の歴史と縁のある作品で、この受賞を心から嬉しく思います。

作品コメント

本作は2023年度福岡アジア美術館アーティスト・イン・レジデンスでの調査をもとに制作しました。早良炭鉱(姪浜炭鉱)のボタ山が博多湾の埋め立てに使われた歴史や、炭素原子のみで構成されるナノ素材・カーボンナノチューブをリサーチし、エネルギー産業とユートピアについて考察するインスタレーションです。



優秀賞 MERIT AWARD



谷澤 紗和子

TANIZAWA Sawako

《お喋りの効能》

The Power of Chatter

2025

1982 大阪府大阪市生まれ

2007 京都市立芸術大学大学院 美術研究科 絵画専攻 修了
京都府在住

受賞コメント

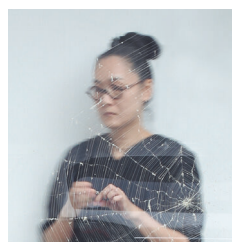
近年、男性中心的な美術の構造を問い直し、女性や多様なバックグラウンドをもつ芸術家の再評価が進められています。福岡市美術館は、日本において早い段階から収蔵作品における女性作家の作品調査を行い、再評価の姿勢を明確に打ち出してきた、先駆的な美術館であると感じています。そのような視点のもとで運用されてきたコレクションに自作が収蔵されることを、大変光栄に思います。また、本作の制作発表にあたりお力を貸してくださった皆さま、そして困難な時代から女性の表現を研究し続けてこられた研究者の方々に、心より感謝申し上げます。

作品コメント

紙を切る行為を通して独自の表現を切り拓いてきた高村智恵子、庫淑蘭、メアリー・ディレイニーの手仕事の痕跡を辿り、知の交換会としての「お喋り」を重ねるように制作した切り紙作品です。西瓜や柘榴、甘粕事件についての高村智恵子の言葉、ポピーとハンヌーン、百足などのモチーフを通して、女性の権利や連帯、虐殺への批判といった現代社会への応答を織り込み制作しました。



優秀賞 MERIT AWARD



平野 薫

HIRANO Kaoru

《空の衣服 (untitled -war kimono-)》

Covering Emptiness (untitled -war kimono-)

2025

1975年 長崎県生まれ

2003年 広島市立大学大学院 芸術学研究科 博士後期課程 総合造形芸術専攻 修了
広島県在住

受賞コメント

九州でののはじめての作品発表のために制作した本作が、このような賞をいただき、大変うれしく思っております。福岡での発表の機会を与えてくださったエウレカの牧野さんと、本賞に関わる皆さまに、心より感謝申し上げます。今後は、地元・長崎を含めた九州での活動も視野に入れながら、制作に励んでいきたいと思っています。

作品コメント

青を基調としたおよそ90年前の戦争柄の着物には、空を飛ぶゼロ戦、海に浮かぶ戦艦などが描かれていました。これは男性用の襦袢で、お尻あたりがひどくすり切れて穴だらけでした。当時日常的に着用されていたのでしょうか。すり切れて穴だらけの襦袢から一本ずつ糸をひき抜き、穴のたびに切れる糸を何度も結びつなげています。執拗に糸をひき抜き結ぶ行為は、空っぽの中にある存在を探しているような行為でもあります。

